

オンラインシンポジウム

第7回 「未来志向の日本語教育」

2023年8月3日（木）

13:50~18:00（日本時間）



主催 筑波大学 CEGLOC 日本語教育部門

共催 筑波大学 CEGLOC 日本語・日本事情遠隔教育拠点

大阪大学 CJLC 日本語・日本文化教育研修共同利用拠点事業

JSPS 研究拠点形成事業 アジア・アフリカ学術基盤形成型「社会的要請に対応可能な日本語教師養成の拠点形成」（代表:小野正樹）

趣旨

2019年2月にシリーズとしてスタートした本シンポジウムは21世紀の刻々と変化する状況の中で日本語教育をどのように構想することができるのかを大きなテーマとし、幅広い分野の研究者に発表および意見交換の場を提供します。

本シンポジウムの発表テーマは教員養成や学習者のスキル、現場での日本語に関する調査報告など、未来の日本教育の発展を期待できる内容となっています。

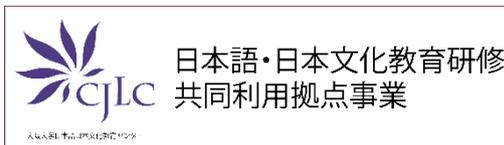
参加登録とアクセス

本シンポジウムはオンライン（Zoom）で開催され、参加は無料ですが、2023年7月27日（木）（23:55 日本時間）までに参加登録をしてください。2023年8月1日（火）までにミーティングのアクセスリンクを送信します。



[参加登録フォーム](#)

共催者ロゴ



シンポジウム実行委員会 Vanbaelen Ruth、文 昶允

問い合わせ先 base.nihongo@gmail.com

発表者には筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育部門が発行する『日本語教育論集』第39号に発表内容をまとめた原稿の投稿申請が可能です。
詳細についてはご確認ください。

プログラム概要

13:40~	開場: Zoom にアクセス 参加登録のうえ、2023年8月1日までにミーティングのアクセスリンクが届かない場合は、 <base_nihongo@un.tsukuba.ac.jp>にご連絡ください。	
13:50~ 14:00	開会にあたり: Vanbaelen Ruth (筑波大学 准教授、CEGLOC 日本語教育部門長)	
	口頭発表は2つのブレイクアウトルームで行われます。ご自由に移動してください。 3つのラウンジを設けています。議論を続けたい方や、雑談したい方、ご自由にお使いください。 必ず Zoom の最新バージョン(5.15.2 (18096))以上をインストールのうえ、ご参加ください。	
	ブレイクアウトルーム①	ブレイクアウトルーム②
14:00~ 14:30	発表 1: 佐藤志穂、栗原幸子、Itzel Valdés, Erika Matute 「ノンネイティブ日本語教師交流会」を通してメキシコ・中米カリブ地域の参加者が得た学び	発表 2: 都合により辞退
14:30~ 15:00	発表 3: 中川飛鳥 オンライン国際交流の実践報告: アメリカ合衆国の日本語初級学習者と日本の高校生の交流	発表 4: アプリル ノラ 働く日本在住外国人の日本語学習アプリに関する感想調査
15:00~ 15:30	発表 5: 武田加奈子 海外大学とのオンライン活動を通じた日本語教員養成の取り組み	発表 6: 日暮康晴 日本語母語話者・日本語学習者による程度副詞の使用実態: 『YNU 書き言葉コーパス』を使用した調査
15:30~ 15:40	休憩	
15:40~ 16:10	発表 7: 高井美穂、立川真紀絵、小森万里 箕面を学習資源とする中級日本語教材の開発—地域社会に一步踏み出す留学生のために—	発表 8: 下村朱有美、日比伊奈穂 理工系学部留学生の日本語ライティングにおける媒体使用と困難点—大学1年生を対象とした聞き取り調査より—
16:10~ 16:40	発表 9: 萩原幸司、山田ボヒネック頼子、梅津由美子、大室文、酒井康子、高木三知子、鞠古綾 OJAE (Oral Japanese Assessment Europe) が描く「未来志向の日本語教育」—CEFR 準拠 OJAE 及び OJAE 道場の実践から—	発表 10: 脇田里子 学部留学生を対象にしたオーディオブック読書の試験的導入
16:40~ 16:50	休憩	
16:50~ 17:20	発表 11: 小川美香 介護の技能実習生のことばとパフォーマンス—参加型アクションリサーチの可能性—	発表 12: 藤本かおる、尹智鉉 社会的要請に対応可能な日本語教育機関に必要なリーダーシップとは—民間日本語学校の当事者に対するインタビュー調査から—
17:20~ 17:50	発表 13: 大塚薫 就職活動を見据えた日本人学生参加型ピア・ラーニング授業の構築	発表 14: 佐藤理恵子 医療コミュニケーションにおける「やさしい日本語」の活用: 医学生へのインタビュー調査から
17:50~ 18:00	総括: 文昶允 (筑波大学 助教、シンポジウム実行副委員長)	
18:00~ 18:30	オンライン懇談会	

プログラムの詳細は次ページに記載

プログラムの詳細

13:50~ 14:00	開会にあたり: Vanbaelen Ruth (筑波大学 准教授、CEGLOC 日本語教育部門長)
14:00~ 14:30	<p>発表 1: 佐藤志穂 (国際交流基金メキシコ日本文化センター・日本語専門家)、栗原幸子 (国際交流基金メキシコ日本文化センター・日本語上級専門家)、Itzel Valdés (グアダラハラ日墨学院・日本語講師)、Erika Matute (ホンジュラス帰国留学生の会 AHBEJA・日本語講師)</p> <p>「ノンネイティブ日本語教師交流会」を通してメキシコ・中米カリブ地域の参加者が得た学び</p> <p>メキシコ・中米カリブ地域においては日本語非母語話者が日本語教師全体の過半数を占める。日本語教師養成課程等は存在しないため、一般向け初級日本語コースを終えた A2 前半相当の学習者がそのまま教師となることも珍しくはない。このような背景から国際交流基金メキシコ日本文化センターでは教師研修等を行い当域の日本語教育の底上げを目指している。「ノンネイティブ日本語教師交流会」は教師の成長と当域の日本語教育を牽引する教師を育てる目的で 2022 年 3 月より開始し、世界 6 地域とオンラインで実施してきている。母語や文化は異なる一方、日本語非母語話者教師という共通点を持つ参加者たちが、テーマについて日本語で経験を共有することで異文化交流を促し、教師として視野を広げることにつながっている。本発表では、事後アンケートの結果および継続参加者へのインタビューをもとに、当域の参加者が交流会とその企画運営から得た学びについて報告する。</p>
	発表 2: 都合により辞退
14:30~ 15:00	<p>発表 3: 中川飛鳥 (南インディアナ大学・大学院生)</p> <p>オンライン国際交流の実践報告: アメリカ合衆国の日本語初級学習者と日本の高校生の交流</p> <p>本プレゼンテーションは、2022 年 11 月に 5 週間にわたり、神奈川県内の公立高校の 2 年生 33 名の英語学習者とアメリカ合衆国の南インディアナ大学の日本語学習者 9 名を対象に実施されたウェブコミュニケーションツール zoom を使ったオンライン国際交流の実践報告である。本実践では、単発的な国際交流を行うだけでなく授業内でオンライン国際交流を取り入れることを目指し、プログラム作成を行った。今後のウェブツールを利用した教育実践に資するべく、実施方法や参加者アンケート結果等を紹介し、実践から得た知見をもとに運営上のポイントやプログラムの改善点等をまとめ、今後の展望を述べる。</p>
	<p>発表 4: アブリル ノラ (早稲田大学・大学院生)</p> <p>働く日本在住外国人の日本語学習アプリに関する感想調査</p> <p>MALL (Mobile-Assisted Language Learning) の普及とともに言語学習アプリを使用した感想を探る研究が次々となされてきた (Munday (2016), Huang et al. (2017), Kessler et al. (2023))。しかし、従来の研究は学生を対象に、日本語以外の言語の学習アプリを使用した感想を調査してきた。よって、本研究では働く日本在住外国人が今まで使ってきた日本語学習アプリのメリットとデメリットに迫るべく、23 か国からきた働く日本在住外国人 93 名の自由記述による回答を日本語レベル別に集計し、QCA (Qualitative Content Analysis (Schreier, 2012)) を用いて質的に分析した。その結果、まずアプリの日本語学習コンテンツの「気に入った点」として漢字を部首別に練習できる点や高頻度語彙を簡単に練習できる点などがあげられた。そして「改善してほしい点」に関して、日本の日常生活で使える日本語の表現のなさや不自然な日本語の例文が上位に上がった。それらの点を働く日本在住外国人の生活の中の日本語使用の困難点と照らし合わせて考察する。</p>

<p>15:00~ 15:30</p>	<p>発表 5: 武田加奈子(白百合女子大学・准教授)</p> <p>海外大学とのオンライン活動を通じた日本語教員養成の取り組み</p> <p>本学日本語教育副専攻でもコロナ禍以降、疑似的な対面場面を創出できるオンラインツールを用い、台湾、ノルウェー、中国などの大学と様々なタイプの活動を相手大学の需要に合わせて実施してきた。授業時間外であっても継続してきた理由として、①小規模大学での学内実習の難しさ、②学習者のレベルに合わせた日本語使用の練習、③ICT を使いこなせる日本語教員需要への対応の3点が挙げられる。事後アンケートの結果では、どのタイプであっても異文化との触れ合いに満足していることは確認できたが、「実習準備としての活動」にするには、実施前の詳細な説明、事後の主体的な振り返りが必要であることが明らかになってきた。また、オンラインであっても接触場面であることに変わりはなく、接触場面としての注意喚起が必要であることも明らかになった。また授業も調査も試行錯誤の段階ではあるがそれらについて報告し、より効果的な運用を考えていきたい。</p>
	<p>発表 6: 日暮康晴(筑波大学・大学院生)</p> <p>日本語母語話者・日本語学習者による程度副詞の使用実態:『YNU 書き言葉コーパス』を使用した調査</p> <p>本研究では「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」を使用して日本語母語話者(以下、NS)、韓国語を母語とする日本語学習者(以下、KL)、中国語を母語とする日本語学習者(以下、CL)の3グループによる書き言葉における程度副詞使用の実態調査を行った。結果より、書き言葉での程度副詞の使用傾向は話し言葉の傾向とは異なること、NSはKL、CLに比べて副詞の使用自体は少ないものの、使用する副詞の種類が多いことが明らかになった。また、使用数の多い語に注目して読み手との関係に注目した分析を行ったところ、「すごく」、「もっと」に話者グループ間での有意差が認められた。詳細な用例分析からは、NSと学習者の副詞使用傾向の異なりは人間関係重視か伝達内容重視か、のように指向される要素の違いによって起こると考えられ、指導においては学習者の意図を踏まえた上で語の使用における待遇的な視点の重要性を示すことの必要性が示唆された。</p>
<p>15:30~ 15:40</p>	<p>休憩</p>
<p>15:40~ 16:10</p>	<p>発表 7: 高井美穂(大阪大学日本語日本文化教育センター・准教授)、立川真紀絵(大阪大学日本語日本文化教育センター・准教授)、小森万里(大阪大学日本語日本文化教育センター・教授)</p> <p>箕面を学習資源とする中級日本語教材の開発ー地域社会に一步踏み出す留学生のために</p> <p>大阪大学短期交換留学「メイプル・プログラム」では、必修科目において地域連携型 PBL を導入し、中級～上級の学生達がグループ活動を通じてキャンパスの位置する箕面の課題を見つけ、解決方法を考え、適切な形で発表・発信することを目的とした学習を行っている。新箕面キャンパスへの移転以来、留学生と地域の人々との関係構築への期待が一層高まっている一方で、中級程度の日本語能力を持つ学生達がローカルな情報に関心を持ち積極的にアクセスすることは難しく、独創性のあるプロジェクトにつながりにくいという課題があった。そこで PBL への橋渡しを行うため、中級レベルの学習者が箕面の自然・歴史・文化・社会についての一般的な知識を得るとともに、出身国・地域の事情について話し合ったり文章を書いたりする活動を通して、互いの文化や社会に対する関心を高めることをねらいとした日本語教材を開発した。本発表ではその具体的な内容を報告する。</p>

	<p>発表 8: 下村朱有美(大阪大学日本語日本文化教育センター・特任講師)、日比伊奈穂(大阪大学日本語日本文化教育センター・特任研究員)</p> <p>理工系学部留学生の日本語ライティングにおける媒体使用と困難点—大学 1 年生を対象とした聞き取り調査より—</p> <p>本調査では理工系学部留学生の日本語で「書く」場面の実態を把握することを目的とし、どのような場面でどのような媒体を用いて書く機会があるのか、及び、どのようなことに難しさを感じているのかについて明らかにする。大学 1 年生の留学生を対象に聞き取りを行った結果、大学での授業に関しては幅広い場面でパソコンが活用されている一方、一部のレポートや課題作成等では手書きで日本語を書いていることが明らかになった。日常生活場面においては手書きの場面が多く、記入が必要となる事項は氏名や住所に限定される傾向が見られた。大学進学前の学習がライティングの場面で活用できているという意見もあったものの、書くスピードや語彙や文法の不足、漢字の知識の活用等に難しさを感じていた。本研究ではこれらを踏まえ、多様な形態での「書く」場面が想定される現代の日本語ライティング指導における媒体使用や指導内容等について検討する。</p>
<p>16:10~ 16:40</p>	<p>発表 9: 萩原幸司(城西国際大学・准教授)、山田ボヒネック頼子(ヨーロッパ日本語教育学研究所・代表)、梅津由美子(ベルリン日独センター・講師)、大室文(佐賀県国際交流協会・相談員)、酒井康子(Spracheninstitut an der Universität Leipzig・講師)、高木三知子(ブラッセル補習授業校・教員)、鞠古綾(ヴェネツィア・カフオスカリ大学・日本語講師)</p> <p>OJAE(Oral Japanese Assessment Europe)が描く「未来志向の日本語教育」—CEFR 準拠 OJAE 及び OJAE 道場の実践から—</p> <p>本発表では、先ず、ヨーロッパ各国で日本語教育を実践している数十名の有志が CEFR に準拠して開発した日本語対話型アセスメント法である OJAE(Oral Japanese Assessment Europe)を紹介し、その研究開発に於いて意識されつつも、今こそ確立された、「日本語教育は日本語を使って生きる地球市民を育てるためにある」という言語教育理念を訴える。次に、有志達が 2021 年 9 月にオンライン上で開設した、OJAE を通して世界中の日本語教師が鍛錬する場である OJAE 道場の取り組みを紹介し、従来の日本語教育観を超えて、「対話力を育成する」という新たな日本語教師の専門性を高めるために道場生達が鍛錬する場の可能性を説く。最終的には、OJAE の根底にある言語教育理念及び OJAE によって高められる新たな日本語教師の専門性を総合することで、OJAE が描き出す「未来志向の日本語教育」実践を提示するのである。</p>
	<p>発表 10: 脇田里子(同志社大学 グローバル・コミュニケーション学部・教授)</p> <p>学部留学生を対象にしたオーディオブック読書の試験的導入</p> <p>昨今、オーディオブック(Audio Book,以下 AB と略す)の発行が劇的に増加している。本発表の目的は日本語教育に AB を導入する際の留意点を明確にすることである。2023 年の 2 か月間、学部留学生 11 名を対象に、Amazon の「Audible」を試験的に導入した。学習者は教員が指定した 2 冊とそれ以外の AB を自由に聴いた。学習者に対するアンケート調査の結果から、日本語教育に AB を導入する際の留意点を述べる。①学習者にとって、聴く読書は読む読書よりも理解が難しいことが判明した。この結果から、学習者が読解可能な日本語レベルよりも若干低めのレベルの AB の選択が望ましいと考えられる。②知識提供型の AB はエッセイ型の AB よりも理解が難しかった。よって、初めて AB を導入する際には和語が多く、聞いて理解しやすい AB が適していると思われる。また、漢語が多い知識提供型の AB を導入する際には、そのテキスト書籍を用意し、聞き取れなかった単語を確認できるようにすることが望ましい。</p>
<p>16:40~ 16:50</p>	<p style="text-align: center;">休憩</p>

16:50~
17:20

発表 11:小川美香(筑波大学・大学院生)

介護の技能実習生のことばとパフォーマンス —参加型アクションリサーチの可能性—

外国人介護人材への日本語教育に関する議論は EPA 候補者を対象に進められ、その知見が他の資格に活かし難い。例えば技能実習生は、資格の取得を直接的に目指すものではないが、長期の就労を見据えて国家試験対策としての「介護の日本語」の学習支援が積極的に行われている。一方、実習生の「ことば」が注目されることは少ない。そこで、ことばを通時的・共時的なコンテキストの中で、絶えず変動する動的な体系と捉える広義の「ことば観」に根差した言語人類学の視座から、実習生の「ことば」とパフォーマンスを読み解く。本発表では、介護の技能実習生と日本人職員、監理団体職員、日本語教師の4者が協働してコミュニケーションについて探究する参加型アクションリサーチのデータについて、実習生の「ことば」とパフォーマンスに着目して分析、考察を行う。そのプロセスを通じてことばを再帰的に問い直すことで日本語教育本来の可能性が拓かれると考えている。

発表 12:藤本かおる(武蔵野大学・准教授)、尹智鉉(中央大学・教授)

社会的要請に対応可能な日本語教育機関に必要なリーダーシップとは—民間日本語学校の当事者に対するインタビュー調査から—

2020年以降、新型コロナウイルス感染症により多くの日本語教育機関は大きな打撃を受けた。感染症の他にも現代の目まぐるしく変化する社会経済的パラダイムに対し、日本語教育の専門家および教育機関はどのように対応していくべきだろうか。社会的要請に対応可能な日本語教育機関におけるリーダーシップについて明らかにすることを本研究の目的とし、リーダーシップ研究の「行動研究」の手法を用い、民間日本語学校の校長と主任教員の3名のリーダーに対してインタビュー調査を実施した。録音データを文字化し、KJ法(川喜田1986)を用いて分析した結果、調査協力者の共通点として「謙虚なリーダーシップ」(Schein & Schein 2020)と呼べる行動と意識の存在が明らかになった。発表では、これらの分析結果を詳細に報告し、日本語教育機関が社会的要請に対応していくことの必要性およびその可能性をリーダーシップの観点から検討する。

17:20~
17:50

発表 13:大塚薫(高知大学・教授)

就職活動を見据えた日本人学生参加型ピア・ラーニング授業の構築

本研究は、オンライン学習ツールとして Microsoft Teams を活用し、日本人学生と協働学習をしながら遠隔地に点在する日本語学習者が、いかに主体的に就職活動を見据えた授業に参画できるかを実践した上で検証し教育現場での直接的な応用を目的としたものである。具体的には、2022年度に「コミュニケーション日本語 I」の授業で、就職活動に不可欠な自己分析・企業研究・面接・エントリーシート作成に必要な日本的マナーや日本語の習得を目的に学習者主体のピア・ラーニング授業が実施された。今回の授業に対する学習者の評価は5段階中4.74で好評価を博し、同目的で行われた対面授業と比較し、積極性や取組度に有意差が生じた。学習者の感想では、日本の就職活動文化の理解が促進されるとともに、日本人学生とのペアワークや質疑応答の可視化という授業形態、オンラインの協働学習によるチームワークの形成、他者との討論や発表を通じて内省を促す効果に対する利点が挙げられた。

	<p>発表 14: 佐藤理恵子(東京大学・大学院生)</p> <p>医療コミュニケーションにおける「やさしい日本語」の活用: 医学生へのインタビュー調査から</p> <p>2022 年の調査では、在住外国人にとって日本語が分からなくて困る場面の第 1 位は病院となっている。外国人患者は家族による同伴通訳が求められることがあり、「ことばのヤングケアラー」を生む温床となることも指摘されている。こうしたコミュニケーション上の問題を解決するために、武田ほかの研究では医療現場における「やさしい日本語」の活用が検討されている。本研究では、医療に関わる人が言い換えを行う際の観点を質的に調査するため、医学部に通う学生を対象として半構造化インタビューを行う。まず外国人患者を診察する場面を提示し、聞き手に配慮した説明をもらう。その後、自身の説明を振り返り、正確さと分かりやすさの間でどんなジレンマを感じたか、何を優先して情報の取捨選択をしたかを語ってもらう。本研究は「やさしい日本語」を用いた医療コミュニケーション教育に貢献することが期待される。現在調査中だが、発表では分析結果を報告する。</p>
<p>17:50~ 18:00</p>	<p>総括: 文昶允(筑波大学 助教、シンポジウム実行副委員長)</p>
<p>18:00~ 18:30</p>	<p>オンライン懇談会</p>